

# 造林地の牧草栽培

小林 景一郎

近来の木材供給不足は、早期育成林業の推進を強く要請しているが、これに応える一方法として森林肥培がある。一般に施肥は、林木に対してのみ行われるが、他力の維持増進をも合せ考えた場合林地全面に施用する必要がある。ここで全面施肥には肥料の流亡という欠点が生ずるのであろうが、これを防止するためには林間に何かを栽培して森林の高度利用を図ればよい。この一法として牧草栽培が考えられる。これは、牧草の栽培による飼料源の獲得となって畜産業振興の助長に結び付くとともに森林肥培による林木の成長促進、雑草の繁茂抑制及び下刈作業不要による労力の節減等、幾多の利点があつて大いに推奨普及されるべきものである。

たまたま 36 年夏期スギ林(7~10 年生)に牧草(ラディノクローバー、オーチャードグラス、イタリアンライグラス、エンバク)を栽培している事例を調査することによってその施業効果を認め、なお、確認する意味において「林地肥培高度利用造林」と名付けて普及展示林が設定されたのである。これは、36 年 9 月下旬施肥(炭酸カルシウム、溶性燐肥、草地肥料 6 号)、混播(牧草種は、オーチャードグラス、ペレニアルライグラス、レッドクローバー、ラディノクローバー)し、翌年 3 月上旬草間地区は、アカマツ(ha 当り 4,500 本)西方地区は、ヒノキ(ha 当り 3,600 本)を植栽した。(面積は、草間地区が牧草

全播区 0.10ha、牧草条播区 0.10ha、対象区 0.05ha 計 0.25ha で、西方地区が牧草全播区 0.15ha、対象区 0.01ha である。)

この造林木の成長状態は、表 1 に示すとおり草間地区では全播区、条播区共に対象区に比して良好な結果を表わしている。(植栽の年は、断然全播区がよいが、翌年は大差がなく林地では条播で十分であることを示していると思う。)しかし、西方地区は、刈取時期を失したため対象区の方がよく、施業効果が認められない。又牧草は、3 回刈取って表 2 のような収量であったが、これは、一般牧草地のそれに何ら劣るものではなく、一応期待どおりの成果を挙げえたものとする。(追肥は、毎刈取後施用)

しかし、これは、両地区共に刈取時期を失したうへの結果であり、年 4~5 回適期に刈取れば尚収量が増加するはずである。前述のとおり牧草の刈取逸機は林木の成長に対しても悪影響を与えるので刈取時期を誤らないことが絶対的条件となるのである。

さいわい、この施業は、37 年度で「造林地牧草混殖事業」として事業化され、補助策(標準事業費の 3 割)が採られることになった。而してこれが急速且つ広汎に普及して農家経済の安定的拡大が確保されることを期待するものである。

(新見農林事務所林務課長)

(表 1) 造林木の成育状況

地区名	区分	平均値				成長比		
		設置時	37 年度	38. 7. 1	比	37/36年度	38/36	
草	平均樹高	①牧草全播区	26.87cm	44.05	60.64	111%	164%	226
		②牧草条播区	29.47	44.63	62.77	115	151	213
		③対象区	29.38	42.76	54.59	100	146	186
間	平均根直径	①	8.01mm	12.11	13.76	101	151	172
		②	8.43	12.01	13.72	101	142	163
		③	8.32	11.76	13.61	100	141	164
西	平均樹高	①牧草区	60.73cm	66.74	69.26	98%	110%	114
		②対象区	63.45	70.32	70.92	100	111	112
方	平均根直径	①	6.91mm	8.59	9.40	97	124	136
		②	6.73	8.04	9.67	100	119	144

岡山畜産便り 1963.08

(2表) 牧草の収量

地区名	採草回数		37年度				38年度
			1回 (5月20日)	2回 (7月12日)	3回 (10月25日)	計	1回 (5月30日)
草間	収量	全条播区	2,210kg	3,450	1,730	7,390	2,330
			1,050	1,430	740		
西方	収量	全体 10a当り	7,350kg	585	2,450	10,385	(6月25日) 6,150
			4,900	390	1,635		

(表3) 成牛1頭当り1年間飼所要面積

家畜	所要面積			備考
	草間全播区	草間条播区	西方	
和牛	14a	33	15	生草所要量 10,500kg
乳牛	18	40	19	" 13,000